

## 入学初期の学生に教員が意図的に関わることの影響 －基礎研究演習での取り組みから－

Effect of intentional participation of teachers on freshmen.

－ From the activity of basic study exercise. －

### 介護福祉学科共同研究

赤沢 昌子            尾台 安子            合津 千香            丸山 順子  
Masako AKAZAWA    Yasuko ODAI        Chika GOUZU        Junko MARUYAMA

福田 明            上延 麻耶            村山 くみ            小坂みづほ  
Akira FUKUDA        Maya UENOBE        Kumi MURAYAMA     Mizuho KOSAKA

#### 〈要旨〉

介護福祉士の専門教育においては、人間関係形成技術が重要になるが、今日の学生は生活経験や社会経験が乏しく人間関係作りが難しい現状がある。そこで入学初期より教員が学生との関わりを意図的にもつことにより、仲間づくりや人間関係がスムーズにいくのではないかと考え、19年度の基礎研究演習の時間を利用して計画的に取り組んでみた。

その結果、意図的な仲間づくりで約7割の学生がゼミの中に溶け込むことができた。しかし、今回の研究において、基礎研究演習の取り組みとの明確な関係性は明らかにすることができなかったが、何らかの要因となり学生間の交友関係が広げられた。しかし、こうした取り組みの中で、学生の個別性までの配慮ができないため苦痛に感ずる学生もいることがわかった。

生活体験を重ねる取り組みとしては、梅漬け、おやきづくり、花壇づくり等を行ってきたが、学生からの評価は高かったので、内容をさらに検討して生活支援につながるものにしていく必要がある。

今後の基礎研究演習では、取り組みのねらいをはっきり提示し、学生が主体的に取り組めるような演習計画を立て、学生の個性に配慮し、自己についての有意味感を増やすような意図的な教員の関わりが入学初期の学生に必要である。

#### 〈キーワード〉

入学初期の学生    意図的な教員の関わり    基礎研究演習    人間関係づくり

#### はじめに

介護福祉士の専門教育においては、人間関係形成技術が重要になってくる。高齢者のみならず障害者や家族等との信頼関係を形成できなければより良いケアにはつながらない。また介護実践はチームで行っていくことから、職員同士の人間関係づくりも重要である。人間関係を形成していくためには、他者理解はもとより自分自身を振り返り自己を理解することが必要である。対人援助職として講義・演習中心の授業や介護実習を通して、介護学生が専門的な知識・技術を身につけていくが、2年という短期間での養成教育における一般的特徴として、十分な専門教育や学生の個々の

状況に合わせた教育を行う上で限界があるといわれている。

社会経験の乏しい、人間関係づくりが難しい学生の教育について教員はそれぞれで悩み、対策を講じており、他の養成校においても地域支援活動や構成的エンカウンターなどを行い試行錯誤の段階である。

本校でも今までは、1年次基礎研究演習・2年次卒業研究演習として各教員がゼミ形式にてそれぞれの考えで演習指導を通し、仲間との関係調整や生活指導を行ってきた。しかし、ゼミを行う中で人間関係づくりが毎年難しくなり、ゼミ仲間とも一緒に行動できない学生や、介護実習の中で利用者との関係づくりができないものや職員との関係で極度に緊張してしまうなどで、実習そのものに適応できない学生も見られるようになり、他学生に与える影響も一段と大きくなってきた。そこで入学初期より教員が学生との関わりを意図的に持つことにより、仲間づくりや人間関係がスムーズにいくのではないかと考えた。平成19年度の基礎研究演習においてゲームなどを取り入れ早期に仲間づくりができるように、また自己理解、他者理解が深まるようにグループワークを計画的に取り組んでみた。今回の取り組みが学生自身にどのような影響を与えたかを探るとともに、今後の取り組みの課題を検討した。

## I 入学初期の学生の特徴

入学当初の学生は自己表現の能力にばらつきがあり、客観的な自己イメージを十分に持っておらず、初対面の人や会話の機会がない人との会話に苦手意識をもつ学生が多く、入学3ヶ月を経ても話したことがない学生が7割近くいるという報告がある<sup>1)</sup>。また、介護学生の社会的関係の特徴として他者が自分をどう見ているか気になると感じている学生が多いという報告があり、このことは他者の視線を意識し、表面的に円滑な関係を形成する傾向があると指摘されている現代の若者の特徴が反映されているものであると考えられている<sup>2)</sup>。1年生の前期において過半数が慢性的な疲労を感じており、その要因として授業時間が1コマ90分と高校での学習時間より長くなったことや2年間で専門的な知識や技術を学ぶため、入学直後から専門用語が並ぶ授業が開始することが考えられている<sup>2) 3)</sup>。このことは、対人ケア専門職を目指す学生の特徴の一つになっており、「身体がだるい」「気分が波がある」「不平や不満が多い」「いらいらする」などの抑うつ傾向の訴えにつながっている<sup>3)</sup>。

このような学生の特徴を踏まえ、入学初期の関わりを重視し、教員が意図的に学生の仲間づくりや自己理解・他者理解に関わることにより、精神的不安を軽減し安定した学生生活につながるのではないかと考えた。

## II 研究目的

1年前期における意図的な基礎研究演習の取り組みの効果と学生への影響を検証し、今後の課題を明確にする。

## III 研究方法

### 1. 研究対象

基礎研究演習に参加している介護福祉学科1年生74名を対象とする。

### 2. 研究方法

#### 1) 基礎研究演習の意図的取り組み(表1)

表1 基礎研究演習の内容

〈ねらい〉 学校生活を送る上で、他者理解を促し豊かな人間性を養う。また、仲間作りと生活体験を重ね介護に役立て早期に学生生活に慣れる。			
回数	日付	内 容	ねらい
1	4月10日	仲間作り (ニックネームジャンケン・星と家など)	心身の構えをとり、やる気を高め新たな出会いを作る。 早期に仲間作りができ、自己開示をしていくことができる。
2	4月17日	仲間作り (一輪車競争・私の自画像など)	仲間との協調性や観察力を養うことができ、相手のことを考えることができる。
3	4月24日	学校周辺探検隊 (やまびこドーム)	課題達成へのプロセスを通しメンバーの多様な面に気づく。学校周辺の状況を把握し、環境に慣れることができる。学校周辺マップを作成してみる。
4	5月15日	各ゼミ活動	ゼミ仲間との交流を図る計画をする。
5	5月21日	花壇を作ろう	学校周辺の花いっぱい運動を行い、花を育てる楽しみを味わうことができる。
6	5月29日	各ゼミ活動	ゼミ仲間との交流を図る。
7	6月5日	他者理解と価値観の違い (名画ゲーム・宇宙船)	自分とは異なる他者を認め、お互いに折り合いをつけながら合意を形成する。一人ひとりの価値観の違いに気づくと同時に相手を理解することができるようになる。
8	6月12日	「梅漬けを作ろう」計画	地域の方にお願ひし、長野県独自あるいは家庭独自の梅漬けを行う計画を一緒に立て、郷土に伝わる伝統味に挑戦する計画を立てる。
9	6月19日	施設ボランティア計画または各ゼミ自由	地域の方との日程調整のため、施設ボランティア、または各ゼミでの活動計画を立てて行動する。
10	6月26日	地区の方より梅漬けを教えていただく	地域の方と一緒に梅を漬けることにより、郷土の漬物に関心を持つことができる。
11	7月3日	施設ボランティアまたは各ゼミ自由	施設ボランティアまたは各ゼミ計画
12	7月10日	施設ボランティアまたは各ゼミ自由	施設ボランティアまたは各ゼミ計画
13	7月13日	各ゼミ活動	ゼミ仲間との交流を図る。
14	7月24日	地域の方との梅漬けパーティー・おやき作り	地域の方を招待し、郷土名物としておやき作りに挑戦し、使った梅漬けのコンテストを行い、一緒に楽しく過ごす。
15	7月31日	出身高校へのPR計画 (ポスター作り)	松短PRポスターを作り後輩へアピールする。

平成19年度の基礎研究演習の前期の時間を、意図的なスケジュールのもとで各教員同一のゼミ活動として取り組んだ。各取り組みについては担当者を決め、計画を立て準備打合せをしながら行った。

## 2) 基礎研究演習の成果のアンケート調査と分析方法

### (1) 調査方法

前期終了時に質問紙調査法によりアンケートを実施する。アンケートは無記名としその場で直接回収とする。回収に当たっては裏面にして回収する。

### (2) 調査内容

①基礎研究演習の内容の良かった点、悪かった点 ②仲間作りの効果 ③学生生活における仲間作りの考え方 ④生活体験としての取り組みへの反応 ⑤前期を過ごして自分自身の変化と基礎研究演習の取り組みの影響 ⑥後期基礎研究演習への取り組みへの希望 ⑦その他意見 このような内容で、選択・記述を含むアンケート用紙を作成する。

### (3) 分析方法

分析には、表計算ソフト Excel と統計ソフト SPSS 11.0 for Windows を用い、単純集計を行った。仲間づくりに対する意見、生活体験・地域との関わりについての意見は肯定的、否定的の2分類で集計した。

## 3. 倫理的配慮

調査協力は自由であり、協力の有無や回答内容が学修に影響したり、成績に不利益を及ぼさないこと、得られた結果は本研究のみとし、他の目的では使用しないことを口頭及び文書にて説明し研究協力を求めた。

## IV 結果

アンケートの回収率は96.05% (73名) であった。

### 1. 基礎研究演習の内容に対する反応とその理由

#### 1) 基礎研究演習の内容に対する反応 (図1)

前期終了時に今までやってきたことを振り返り、内容に対しての学生の反応をみた。この中で、梅漬け講習のお礼として地域の方を招いて、おやきを作ってお茶会を開いた内容が67.1%と1番良かった内容となった。2番目が地域の方との梅漬け、3番目が仲間作り・学校周辺探索・梅作り計画と続いた。地域の方との関わり、梅漬け・おやき作り、仲間作りなど人と力を合わせて何かを作ったり・食べたりすることは良い取り組みとして挙げられている。

ボランティアについては、各ゼミ担当教員の指導のもとで計画を立て、施設に出向いて利用者との関わりをもってきたが、ゼミごとでの取り組みの差が多少出ていたため、ボランティアの3回の評価でバラつきが出てしまっている。しかし、3回とも良かったが悪かったを上回っている。

仲間作りのゲームや他者理解・自己理解をするためのグループワークを取り入れたが、最初の時期に行った「ニックネームじゃんけん・星と家の図示」が、良かったとして45.2%で最も高かった。他の仲間作りを狙いとしたものは、回を重ねるごとにその割合は減少している。他者理解と価値観の違いを意識させるねらいで行った「名画ゲーム・宇宙船」は23.3%であった。

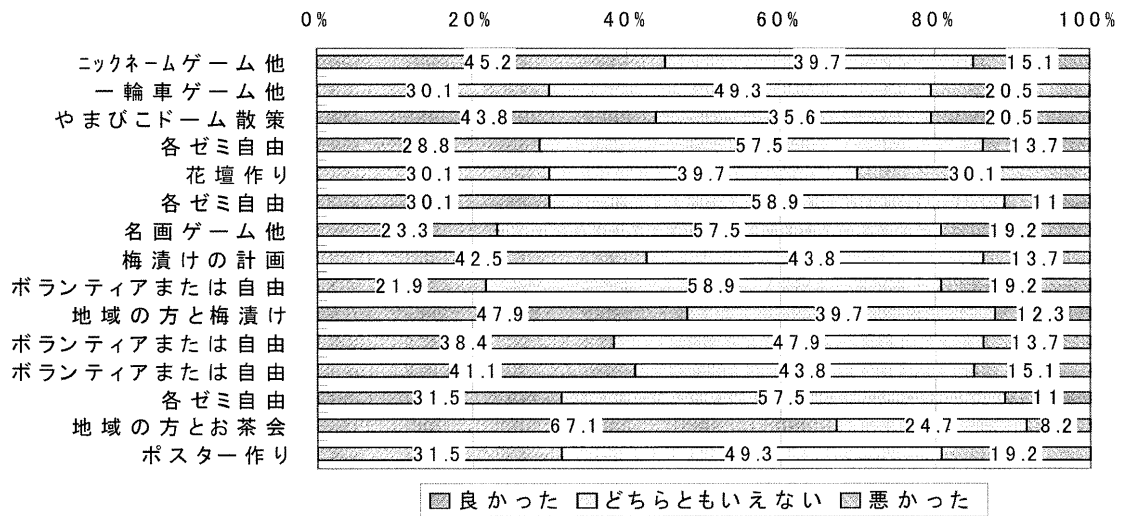


図1 基礎研究演習の内容に対する反応

2) 反応の理由

(1) 良かった理由

良かった理由としての各項目の自由記述では20～30名が記入しており、「楽しかった」がどの内容においても最も多く、活動を通して「仲良くなれた」「交流が深まった」「協力できた」「価値観の違いがわかった」などがあげられていた。

(2) 悪かった理由

悪かった理由としては、各項目の回答者が10名以下と少なかったが、「つまらない」「趣旨不明」「準備不足」「面倒」というものが書かれていた。

2. 基礎研究演習での取り組みと交流効果

1) 仲間作りとしての効果 (図2)

ゼミのグループに溶け込むことができたかという設問に対して、「話したことがない人と話せた」「仲間と協力できた」など、ゼミの中に溶け込むことができたという学生は、69.9%であった。この比率は今回の取り組みがあったため高くなったという判断はできないが、約7割の人が溶け込んでいることになる。

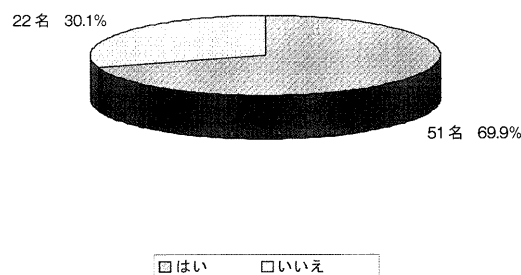


図2 ゼミに溶け込むことができたか

## 2) 仲間作りへの意見 (図3)

基礎研究演習の意図的な取り組みとして、仲間作りもひとつのねらいとしてきたが、学生生活の中で学生自身がどのようにとらえているかを知るために設問をした。しかし、仲間作りについては自由記述としたため、今回の取り組みに対しては、無回答が21名(28.8%)と多くなってしまった。記述された内容を良いこととしてとらえているものを肯定的、仲間づくりを必要としないものを否定的として、内容を2つに分類した。その内容を見ると、42名(57.5%)の人は「仲間作りは良いこと、大切なこと」「交流ができ仲間ができた」「楽しく過ごせた」「一緒にいる時間が多いから仲良くなれる」「仲間をつくりやすい」など肯定的にとらえている。また、「自分と合わない人とは話をしない」「強制してまで仲間作りをする必要があるのか」「仲間をつくろうとは思わない」というような否定的な考えを示したものが10名(13.6%)であった。

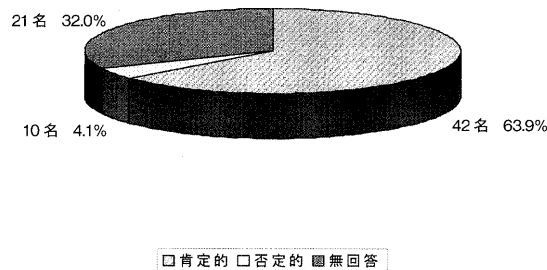


図3 仲間づくりに対する意見

## 3) 生活体験としての意図的取り組み (図4)

生活体験として実施した地域との関わり・交流についての設問も自由記述としたため無回答が24名(32.9%)と多くなってしまった。仲間づくりと同様に肯定的、否定的な意見という2分類でまとめた。花壇作り・梅漬け計画・梅漬け・おやき作りとお茶会の3回行ったが、44名(60.3%)の学生が今回の取り組みに対して肯定的であった。「もっと地域の人との交流をしたい」「知らないことが知れてよかった」「協力する大切さがわかった」「家でやらないことを体験できた」「文化を知る機会になった」などの意見が書かれていた。否定的な意見は5名(6.8%)と少なかったが、「花壇は不必要」「花壇は意味がない」など花壇作りに対するものであった。

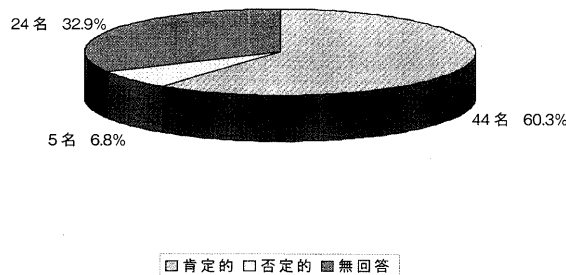


図4 生活体験・地域との関わりについての意見

3. 自分自身の変化 (図5・6)

入学後半年間の自分自身の変化についての設問では、33名(45.2%)が変わったと思っている。「学校が楽しくなった」「友達が増えた」「価値観が広がった」「いろいろな人と気軽に話せるようになった」「自分を出せるようになった」「よく笑うようになった」等、学生生活の幅が広がりだして自分を出せるようになってきていることがわかった。変わっていないと思っている学生は29名(39.7%)いたが、その詳細については自由記述としなかったためわからない。変化は主観的なものであるため、曖昧さを残してしまった。

また変わったと思っている学生のうち基礎研究演習が影響したと思っている学生は12名(36.4%)いた。基礎研究演習の影響を受けたものでないとする学生も11名(33.3%)でほぼ同数であったが、何らかの影響を与えるものである。

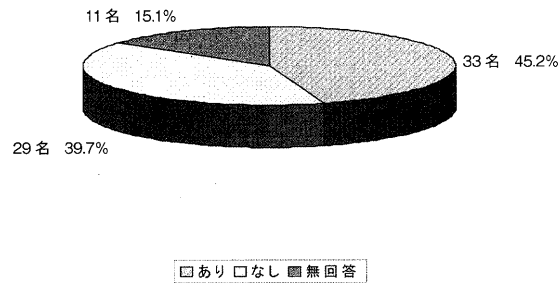


図5 入学後半年間における自己の変化の有無

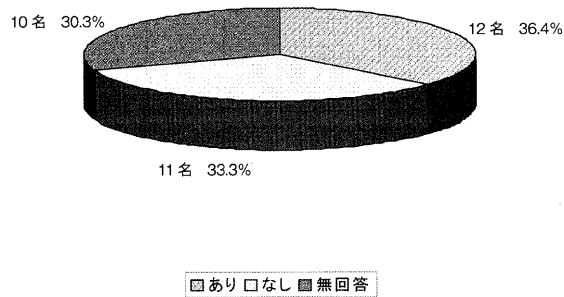


図6 基礎研究演習の影響

## V 考察

### 1. 基礎研究演習での仲間作りの意図的取り組みの効果

ゼミ分けは、入学時に男女の人数的割合だけは均等になるように配慮し、7名の教員が10～11人の学生を担当するようにランダムに分けるため、仲良し同士でかたまるということではなく、知らないもの同士というところから出発する。入学初期は同じ学校出身とか、名簿の前後で仲間作りがされてくる。そうした中で仲間作りを意図とした取り組みは、ある程度の効果はあげているとみることができる。ゼミの中での交友関係が広がり、溶け込むことができたものが7割以上いることからいえる。矢部らは学生のコミュニケーションの分析の中で、初対面の人や会話の機会がない人との会話に苦手意識を持つ学生が多いが、苦手意識をもつ対象を避けたり、話しやすい人とばかり話をしていることから自分自身の傾向に気づきにくく、また入学3ヶ月を経ても話したことがない人が7割近くいるという<sup>1)</sup>。このことからみても意図的な取り組みが交友関係を広げたと考えられる。

基礎研究演習の時間を利用した、意図的な仲間づくりの関わりは一定の効果を呈しているが、学生の個別性までの配慮ができないため苦痛に感ずる学生もいることがわかった。

### 2. 基礎研究演習の意図的な取り組みの課題

基礎研究演習での意図的な取り組みは、今回が初めてであるので、今回の結果と学生の自由記述の意見から課題について考察してみた。

#### 1) 仲間作り

仲間作りの1回目は、学生の緊張を取ることを目的にしてゲーム感覚で、人の考え方・とらえ方の多様性や違いに気づき、自己開示が促進されることをねらいとした。しかし学生の中には、「自分をわかってくれる人が何人かいればよい」「仲間を作ろうと思わない。頑張るものでもない」「自分と合わない人とは話をしない」「あたりず触らずでよい」「自分が苦手だと感じてきた人が多く、こんなものかと思った」などの意見があり、意図的な仲間作りに対して、否定的な学生も見られた。現在のゼミでの人間関係をみてみると、仲間に入ろうとしないで自分から遠ざかっている学生も見受けられる。それぞれに話せる仲間をもっているためかゼミの仲間作りには消極的になってしまっている。

現代の青年の友人関係の特徴として自分自身を開示するようなかかわり方を回避し、表面的な楽しさの中で群れるが、互いを傷つけないように互いの内面に踏み込まないように気を遣いながら関わるという特徴があり、「ふれあい恐怖」的な傾向がみられることを岡田は指摘している<sup>4)</sup>。本学の学生にも言えることであり、介護福祉士という対人援助職を目指す学生には、初対面や苦手意識をもつ人との関係形成もできるようにしていく必要がある。

狭い交友関係にある学生は、それで良しとせずにもっと多くの人との関わりをもってほしいと思うが、仲間作りが苦痛になってはならないと考える。人との交流を深めていく中で個別性も大事にしていかなければならない。4月当初は教員も学生との信頼関係を築くのに時間を要する。個別性を把握した上での対応ができるようにしていくことが必要である。そのために教員間の情報交換も重要になる。

#### 2) 生活体験

花壇づくりは、介護の現場で行われている園芸療法に着目し、学内の環境に目を向けていけるようにと考えたが、植物に水をあげなくては枯れてしまうというところには目が向けられなかった。



花壇づくりについては、何のためにやったのかわからなかったという意見もあり、意図とすることが十分に伝わらず、最も評価がわかれてしまった結果であった。生活環境を考えるきっかけにならなかったことは残念である。計画した段階で、ねらいについて十分理解を得る努力が必要であった。そして、学生とともに計画を立てていくことができたなら、学生自身が責任をもって取り組むことができるのではないかと考える。自分の生活にはあまり関係が無いことには興味をもつことが少ない学生に、身近な花の名前を覚えることや咲いた花に関心をもち、心を寄せるという体験をすることが高齢者の生活を支えていく中で必要な援助技術の一つになりうるものである。

梅漬けは、多くの学生が未経験であり、家庭では梅漬けはしているが手伝ったことがないという学生が大半であった。梅漬けはその家庭の漬け方があり、味もそれぞれ違うことから、地域の高齢者の方から作り方の手ほどきを受け、郷土の文化に触れることにした。梅の塩もみや梅割り、しそ揉みなどを地域の高齢者とともにやり、各ゼミごとで漬け方もそれぞれで行った。

おやき作りにおいては、学生の出身地によって作り方が違うなど学生が主体的に取り組むことができ、みんなで共同して行うものや身体を動かして楽しく行うものは「良かった」という結果になっている。介護を学ぶ学生にとって生活を支援していくためには、生活体験を増やすことが必要なことであると感じた。今後内容を検討して学生が主体的に取り組めるものを提供して、みんなでできるものを考える必要がある。

### 3) 地域の高齢者との交流

梅漬けをするにあたって準備するものや漬け方を教えてもらい、一緒になって漬けることができた。高齢者の生活の様子やボランティア活動の話も聴くことができ、楽しく交流することができた。地域の方たちにも若い学生と交流ができ楽しかったという評価をもらっている。

健康で元気な高齢者に接することで、活発に生活をしている様子を知るきっかけになり、高齢者の理解につながった。「楽しかった」「思い出ができた」とする学生が多い中で、少数であるが「つまらない」「必要ない」と答えている学生もおり、交流の輪に入れない学生がいることに注目していかなければいけない。

### 4) ボランティア体験

ボランティア体験は、施設との交渉から内容について自主的に取り組むことができればよかったが、教員主導になりがちで、学生から「強制的」と、とられてしまった面もあった。行うことができたゼミでは、「利用者の方に喜んでもらってよかった」「勉強になった」「協力できた」などの意見が出ている。ボランティア体験では、施設に向いて初対面である利用者とコミュニケーションをとることで、自分を出すことが求められ、自分自身の傾向にも気づくことができると考える。

### 5) 意図的な取り組みの課題 (図7)

学生の意見の中から、今回の取り組みについての課題を整理して構造化してみた。学生自身の個人因子への配慮と働きかけが必要であり、また教員の取り組みへの共通理解や指導力、取り組む内容の検討および十分な準備と打合せが必要になる。

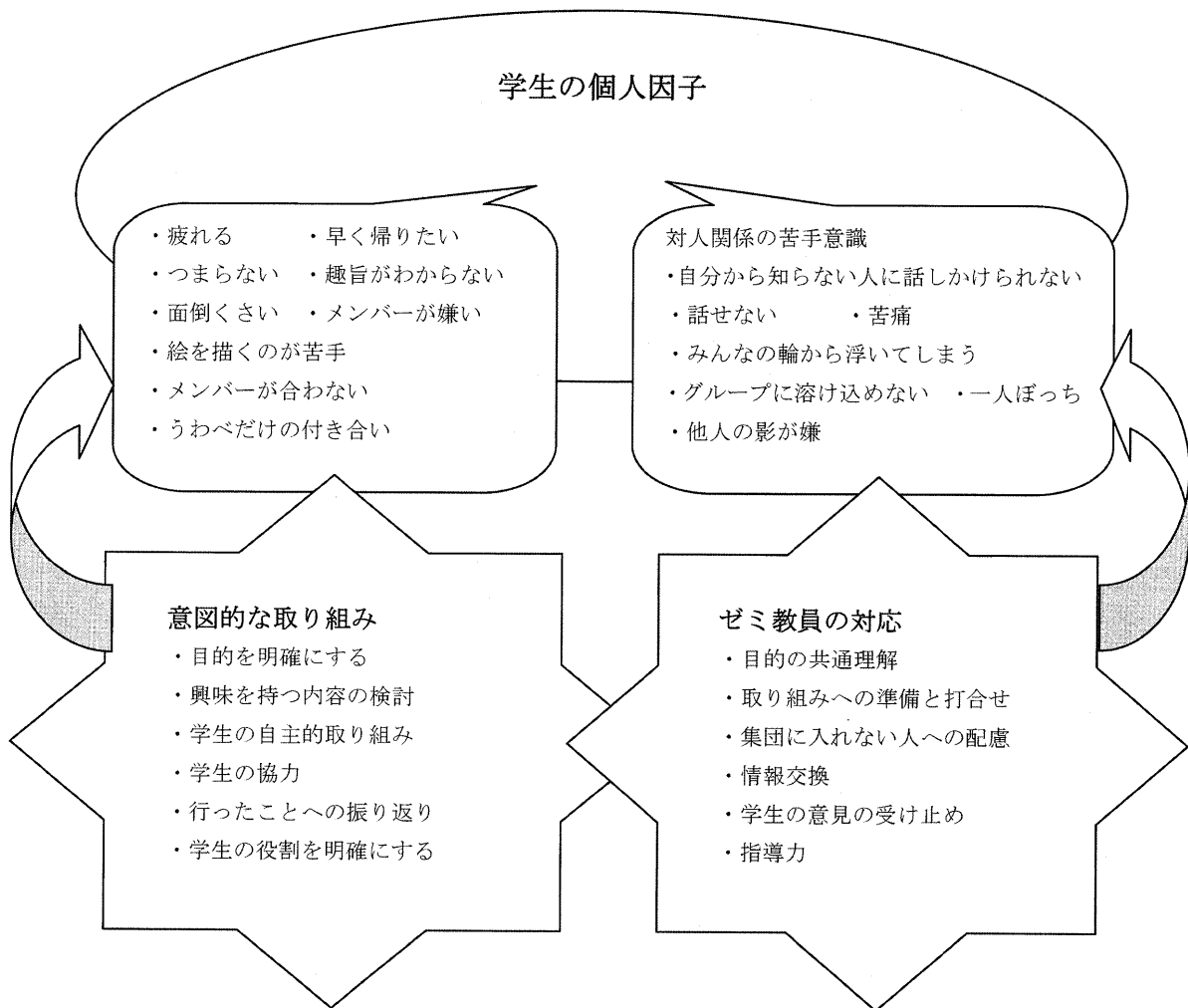


図7 課題の関係図

## VI まとめ

意図的な仲間作りについては、今回の基礎研究演習の取り組みとの明確な関係性は明らかにすることができなかったが、意図的取り組みは、学生自身の変化をもたらす要因になっており、入学からの生活環境の変化の中で、学生生活の幅を広げ、自分自身を出すことができるようになってきている。

今後の基礎研究演習での取り組みの課題として、内容の検討と教員の共通理解を深め、事前準備を十分に行い、意図的なねらいを学生が十分に理解した上で、主体的に動けるようにして取り組むことが重要であることがわかった。また、学生一人ひとりの個別性を把握して適切な指導が求められるため、教員間の情報交換や連携を密にとり、学生の個別性にも配慮していく必要がある。

## 引用文献

- 1) 矢部弘子、大澤史伸、杉山せつ子他：介護実習 I におけるコミュニケーションの特徴－学内演習・実習記録類の分析を通して－ 聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要 No2 2003 p 117～127
- 2) 大高恵美、小坂信子、原田慶子、藤沢緑子他：学生生活チェックカタログを用いた学生生活の実態調査－介護福祉学科学生の結果－ 日本赤十字秋田短期大学紀要 第7号 2002 p39～44
- 3) 南好子：対人ケア専門職を目指す学生の心の健康状態 大阪健康福祉短期大学紀要 創刊号 2003.3 p14～20
- 4) 岡田努：現代学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究 第10巻 第2号 2002 p69～84

## 参考文献

- 新田成彦：福祉実践を養う地域支援活動の意義—アクティビティ・ビオトープ・介護予防・耕生活動を中心に—中央法規出版株式会社 介護福祉教育 No23. 第12巻 第2号 2007.3 p16～19
- 勝又あすか：感情豊かな人間性を養うホリスティック教育の実践 中央法規出版株式会社介護福祉教育 No23. 第12巻 第2号 2007.3 p20～23
- 児玉龍治：介護福祉士養成教育におけるグループワーク体験による学生の変化に関する研究 中央法規出版株式会社 介護福祉教育 No23. 第12巻 第2号 2007.3 p65～72